

学会報告

第十一回国際政治学会モスコー大会に参加して

山 本 靖 幸

目次

- 一 はじめに
- 二 大会のテーマと報告
- 三 おわりに

一 はじめに

一昨年八月十二日よりモスコーで開催された第十一回国際政治学会世界大会 (International Political Science Association, IPSA) と学会終了後に行われたポスト・コンGRES・ツアに参加するため、ソヴィエトを訪れた。

大会は八月十二日より十八日までモスコー郊外のレーニン丘に建つモスコー大学で開催され、約五五ヶ国から約八

〇〇名が参加した。参加国の中では主催国であるソヴィエトが最も多く、次いでアメリカの約二七〇名、メキシコ六五名、ドイツ六〇名、インド約四〇名、イギリス三〇名、フランス約二〇名であった。いわゆる第三世界諸国からも参加をみたが、しかし欧米、東欧諸国その他の国々と比較した場合、実に少数であった。恐らく、全体でも五〇名程度ではなかったかと思われた。日本からは約二〇名であり、本学からは矢崎正徳教授、三浦信行助教授、筆者の三名が参加した。

尚、本大会には、イスラエルと韓国の政治学者及び関係者が、第二次大戦後、はじめてソヴィエト政府より入国を許可され、モスコーに入った。当初、ソヴィエト政府は、この両国に対してビザの発給を意図的に停止していた。しかし結果的には世界政治学会の努力によって実現することとなったものの、若し、ソヴィエト政府が、そのビザ発給を停止したならば、恐らく、モスコー大会は延期されることになったであろうというのが一般的な観測であった。現に、アメリカの参加者が予定よりかなり下回ったのであるが、それが主たる理由と言われた。しかし、ソヴィエト政府の許可によって、イスラエルからは約三〇名、韓国からは約二〇名が参加した。そして、大会終了後に行われたポスト・コンGRES・ツアではその一部の韓国の政治学者の方々を含む欧米などの一〇カ国の学者（三七名）と一緒に、ソヴィエト国内を旅することとなったのである。

二 大会のテーマと報告

大会におけるメイン・テーマは、第一「平和の政治学」、第二「開発とシステム変化の政治学」、第三「一九四九年第十一回国際政治学会モスコー大会に参加して

以来の政治的知識における累積的増大」の三つから構成された。筆者は、主として第一の「平和の政治学」と第二の「開発とシステム変化の政治学」のメイン・テーマの各セッションを選んだ。これら三つのメイン・テーマのうち、この第一の「平和の政治学」の各セッションは総じて参加者が多いように思われた。たとえば、その好例が、イギリスのスーズン・ストレンジ(Susan Strange)の組織する「國際緊張の緩和」のサブ・セッション「外交上のデタント」の場合があげられよう。筆者も専攻上、特に関心があり、同テーマにのぞんだが参加者が余りにも多いため、残念ながら同会議場に入ることができなかったほどである。

ちなみにメイン・テーマの第一である「平和の政治学」の各セッションを紹介すると、

- 1 平和の概念、a 平和の概念の歴史的発展、b 平和のもう一つの問題。
 - 2 國際緊張の緩和、a 外交上のデタント、b 紛争処理。
 - 3 軍備競争と軍備管理、a 東西軍備競争のモデルと分析、b 世界軍備競争と軍備管理の諸問題。
 - 4 平和と変化する世界秩序、a 変動のチャレンジ、b 変動へのプレッシャ。
 - 5 平和と戦争の国内政治学、a 国内政治と対外政策、b 防衛の政治学。
 - 6 平和への道程としての勢力均衡対統合、a 安全保障と勢力均衡、b 脅威、勢力均衡と平和。
 - 7 国内紛争、国家間紛争と國際平和、a 国内紛争と国家間紛争—1、b 国内紛争と国家間紛争—2。
 - 8 共存と平和を追求する諸要素とその戦略、a デタントと安全保障、b 共存と危機からの脱却。
 - 9 特別ペーパー、a 東西関係に関する研究の方法論的諸局面、b 概念的・理論的諸問題。という項目であった。
- この中で、筆者の関心をもったいくつかの研究報告があった。たとえば、アメリカのペンシルバニア州立大学のロ

イスE・レオポルドのキプロス問題がそれであった。

キプロス問題とは直接的には同島におけるギリシャ系住民とトルコ系住民間における対立であるが、それが表面化したのは、周知のように、一九六〇年、イギリスより独立し、キプロス共和国となった直後である。以来、キプロス問題は、関係国たるトルコ、ギリシャおよびイギリスはもとより、米ソという二大国が「安全保障」の名のもとに介入するまでに発展したのである。

キプロスは東地中海にうかぶ一小島にすぎないが、それが世界的な問題にまで発展したのは、同島のもつ軍事戦略的重要性に外ならない。

たしかに、現代の戦略からみれば、かつての重要性が失なわれ、せいぜい「武器庫」程度の価値しかないと考えられる。特にベトナム戦争後のミサイルの発達はいちじるしいものがあり、それによってある者は、もはや「力」の政策に基いた行動は、全くナンセンスであると主張する。しかし、そのことは「マト」を得たものといえるであらうか。「否」である。理由は、一九七〇年代中頃から後半にかけて「力」による行動が増大したからである。たとえば、ルーマニアのブカレスト大学のシルヴィ・ブルカン (Silviu Brucan) は「軍事力」の使用を強調し、それが一九七四年トルコが決定的侵入を実行しえた適例であるとする。

現にトルコは、同年七月二〇日早朝、海空総兵力約六〇〇〇名と戦車四〇輛をもって出撃し、キプロス東部の港湾都市ファマグスタから、首都ニコシア、西部レフカを結ぶ、いわゆる「アッチラ・ライン」(停戦ライン)によって、同島の三分の一を占める北東部を制圧したのであるが、これは、トルコが和平会議で提唱したキプロス連邦化構想の境界線であったので、所期の軍事目的を達することができたのである。ちなみに、トルコがこのような軍事行動を起

した理由は、ギリシャの派遣將校の支配下にある「キプロス国防軍」がクーデターを起し、いわゆるエノシス（ギリシャとの統合）の裏切者としてマカリオス大統領を追放したことによるものであった。これによってトルコは、キプロスにおけるトルコ系住民の安全確保を理由に、延べ三万五〇〇〇名の大軍を派兵し、僅か三日間の戦闘でギリシャ側を敗北させ、圧倒的な勝利をえることができたのである。

キプロスは、長い間、その軍事戦略上の重要性ゆえに、列強の武力戦闘の焦点になってきた。それは、少なくとも、紀元前一五〇〇年エジプト帝国に征服されて以来、二〇世紀における独立まで綿々と行なわれてきた。たとえば、この間、同島における支配は、フェニキア人、アッシリアのサルゴン、ペルシア、アレキサンダー大王等と続いたが、ローマ帝国の世界統一によって中断され、紀元三九五年ローマ帝国の分裂後、二再、活発化し、ビザンチン帝国、イスラム教徒、十字軍、エルサレムのギー、イタリーのジェノバ、ベネチア、そしてオスマン・トルコ等とほぼ間断なく行われてきた。オスマン・トルコ帝国のキプロスに対する支配は、一五七三年以来、約三〇〇年間行われた。これは、ビザンチン帝国以来の長期にわたるものであった。同島に対するトルコ帝国の初期における統治は、農奴制の廃止、キリスト教徒へのかなりの自治を認めるなど比較的寛大であった。しかし、その統治も次第に、住民を無視するものとなり抑圧的なものとなったため、住民の抵抗が強まるところとなり、ついに、一七六四年に大規模な反乱の起るまでになったのである。キプロス住民の反乱は、十九世紀に至っても、一八〇四年、一八二一年と相次いで起り、とりわけ一八二一年の反乱は、ギリシャ独立戦争へと発展するほどのものであった。その上、更に、一八五三、一八七七年にみられるようにロシアとの戦争が続いたために、国力は完全に疲弊した。そこでトルコは、国力回復のための援助をイギリスに要請したのであるが、その代償としてイギリスにキプロスの行政権委任を余儀なくされ

たのである。そして二〇世紀の初めに至って、トルコが第一次大戦にともなうドイツ側に立つて参戦したため、一九一四年十一月同島はイギリスに併合されることとなり、一九二五年にはその直轄植民地となったのである。以来、イギリスの同島における支配がその独立まで続き、東地中海におけるイギリスの軍事基地のみならず、一九五五年、エジプトの民族運動によってスエズ撤退を余儀なくされて以来、キプロスは西アジア最大のイギリスの軍事基地となったのである。しかし、イギリスの第二次大戦後、とりわけスエズ戦争後の国力の低下にともなう、同島に対する影響も減少した。そのイギリスに代ってその影響をおよぼすに至ったのが外ならぬアメリカであった。いずれにしても、イギリスのキプロスに対する重要性が増大したのは、外ならぬオットマン帝国の衰退とスエズ運河の開通であった。それは、当時、イギリスには、マルタ島とアデンの間には、一つの基地もなく、ロシア帝国の南下政策を阻止し、インドに対する新通路を保護するためにキプロスの必要性が生まれたのである。

同研究報告は、更に、米ソの二大国が、なぜ、キプロスに影響をもたらすかという問題に言及し、まず、アメリカの同島における重要性は、ソ連の地中海への進出にともなう増大した、とする。それは地中海における如何なる地域よりも重要であることは、今日の国際情勢に照らしてみれば、明白に理解されることである。同島は、海軍基地および空軍基地としても重要であることはもとよりであるが、特に、それが重要な意味をもつのは、現代戦において絶対不可欠である情報目的のための施設である。イラン・トルコにおける同様の施設の停止が、キプロスの存在を増々意義あらしむるに至ったのである。すなわち、アメリカがこのことを痛切に感じたのは、第二次戦略兵器制限交渉いわゆるSALTⅡ条約の締結においてであった。従来、アメリカの対ソレーダー基地は、主としてイランとトルコであった。しかしその対ソレーダー基地は、イラン革命とトルコの七五年七月の同国内における米軍基地閉鎖によって

失なわれるに至ったのである。このことは、アメリカにとっていわば致命的な損失となった。この両基地の損失が SALT II の重大な問題点の一つでもあり、いわゆる議会の承認を得ることができない一因となったのである。今は幸いにして、トルコの基地のみが回復されるに至ったのであるが、しかし、トルコの政情からしてやはり将来の対策は必要であろう。一方、イランとの関係においても、人質問題は幸いにして解決したとはいえ、両国の改善がなされる見通しは全くない。従ってアメリカにとってはキプロスのみが現実的には、東地中海における対ソ基地として増々重大な意味をもつことになるのである。しかし、問題は、同島における二つの民族の対立、抗争である。この民族のたえざる対立・抗争こそが、アメリカの同島における「力」を減退させ、自由主義国家群の最たる地域的集団安全保障機構たる NATO（北大西洋条約機構）を混乱させているのである。

ソヴィエトの利益は、トルコ海峡の制圧である。それがまた、ロシア時代からの伝統でもある。トルコとギリシャの対立は、ソヴィエトにとって最大の利益である。南ヨーロッパにおける NATO・メンバー間における不和状態こそ、ソヴィエトの利益のなにもでもない。

たしかに、トルコ、ギリシャ両国の対立は厳しく、一朝にして解決するとは思えない。しかしその対立によって両国は何を得ようというのであろうか。両国の利益の追求こそが、西欧同盟を弱体化させているのみならず（ギリシャは、一九七四年八月十四日トルコ軍の再度の軍事行動によって、NATO 軍事統合機構からギリシャ軍の引き揚げを明らかにした。ギリシャのこの軍事統合機構、離脱措置はキプロス・クーデター勃発時から懸念されていた NATO 防衛網の部分的崩壊を意味するものであり、NATO 加盟国にとっては強いショックをうけたのである）キプロスを増々危険な状態に陥らせる重大な要因と思われる。

筆者は、キプロス問題に強い関心をもっており、以前にも本研究所紀要（第二号、キプロスにおける国連平和維持軍）においてとりあげたことがある。レオポルド教授の研究報告は、今後のキプロス問題についての研究に多いに参考になると思われる。

その外、筆者の関心をもった研究報告と討論がいくつか行われた。たとえば、研究報告では、インドの西ベンガル大学のバイドヤナス・カー（Baidyanath Kar）の国連問題をはじめ、軍備問題、軍縮問題等であるが、討論においては、やはり、ソヴィエトのアメリカ・カナダ研究所（Institute of the USA and Canada, Moscow）のゲオルギー・アルバート（Georgii Arbatov）とアメリカのミシガン大学のデヴィット・シンガー（David Singer）による「外交上のデタント」（Diplomatic détente）があげられよう。（しかし、筆者はこの会議室には前述の理由によって入室できなかったで、その内容については、筆者の友人とメンバーの方々によるものである）いずれにしても、それらについては、残念ながら紙数の関係で紹介できないが、やはり今後の研究においてふれていきたいものと思っている。

三 お わ り に

大会期間は、一週間であった。その間、朝九時から午後の五時まで大会会場のレーニン丘のモスコウ大学で過し、可能なかぎり多くのセッションに接しようと走りまわったので、実のところ、相当の疲労をおぼえた。しかしその疲労も、大会最終日の十八日夕夜のソヴィエト政府主催の閉会レセプションに出席して、完全に解消した。実に、たいへんなもてなしのためであった。レセプションは、十二日夕夜の発開式の特別セレモニーと同様にブレジネフ書

記長代理やソヴィエト科学アカデミー会長そしてその他多くの要人、大会関係者等の挨拶にはじまり、次いで、ロシアを代表する芸術家達による歌やダンスが演じられたが、そのダイナミックなロシアダンスなどのすばらしさに、正に会場われんばかりの歓声と拍手が沸き起こるほどであった。とりわけ、けんらんたるロシアのバレエは会場を魅了し、ハイ・レベルなロシア芸術を西欧諸国の人々に、鮮烈な印象を与えたのであった。聞くところによると、ロシアバレエは、最初から独自なものではなく、初期にあつては他の文化と同じように、ヨーロッパ人によつて育成され、その影響下にあつたが、十九世紀後半になつてはじめて、今日現在のロシアの独創的民族バレエとなつた、ということであつた。いずれにしても、いわゆる芸術に比較的確い筆者ではあるが、今なお筆者の脳裏にレセプションにおけるそのバレエのシーンがあざやかに想い起されるほどである。それほど深く感動したのであるが、そういう中で、世界各国から出席した人々が、グラスを片手に、ロシア料理を味わいながら、思想・信条を越えて談笑する姿は、実に國際政治の現実からは到底考えられない状態であつた。いずれにしても、ソヴィエト政府が本大会には相当力を入れてゐるということは、大会参加者の間においてはよく言われたことであつた。たとえば、毎日朝夕の各ホテルと大会会場間のバスサービス、大会会場における昼食の料理の内容など、西側諸国の力をもつてもなしえないであらうと言われたほどである。この閉会レセプションはその最たるサービスであつたと思われる。

大会終了後、予定のポスト・コンGRES・ツアに参加した。コースは、バルト諸国のうちのラトビア、エストニアとレニングラード等であつた。このコースのグループのメンバーは、スイス、西ドイツ、イギリス、アメリカ、ニュージーランド、イタリー、フィリピン、フランス、韓国等の政治学者であつた。このポスト・コンGRES・ツアについてはやはり紙数の関係で省略するが次のチャンスには是非ふれてみたい。しかし、北のベネチアとしばしば呼ばれ

るほど、水と緑の美しい白夜の都市レニングラードの町、冬宮のエミルタージュそして数多くの同市の名所遺跡は、是非、もう一度、時間をかけて訪問したいものと思っている。

筆者にとつては、今回のソヴィエトは最初の訪問であった。そのソヴィエト滞在期間中、ソヴィエト科学アカデミーの方々、国連大学副学長の武者小路公秀教授をはじめ、実に多くの方々に（紙数の関係でお名前の挙示を省略させて頂くが）お世話になった。武者小路教授はIPS A世界学会における日本の正式代議員（二名のうちの一人（他の一人は学習院大学の田中靖政教授）でもあり実に多忙であつたにも拘らず、最後まで筆者の渡航上の事務接衝をソヴィエト当局としていただいたのである。心よりお礼申しあげたい。また矢崎正徳教授、三浦信行助教授にも本当にお世話になった。とくに三浦助教授には同室ということもあつて、いろいろ御迷惑を掛けた。旅なれない筆者が比較的スムーズな行動をとれたのも、実に、三浦助教授の適切なアドバイスによるものであつた。

また末文乍ら、今回の第十一回国際政治学会モスコ大会に参加することについて心あたたまる御理解を下された柴田総長をはじめ、本大学関係者に対して心よりお礼を申し上げる次第である。

日本政教研究所記事

研究会の部

第九回研究会

日時 昭和五五年五月一〇日

報告者及びテーマ

池田十吾講師

「広田外相の対支政策について」

第二〇回研究会

日時 六月七日

報告者及びテーマ

重藤信英客員教授

「アメリカ日系人の苦悩」

第二一回研究会

日時 一〇月二五日

報告者及びテーマ

日本政教研究所記事

日本政教研究所記事

山田昭二教授

「中近東諸国の不協和」

第二回研究会

日時 十一月二十九日

報告者及びテーマ

池田十吾講師

「最近の韓国情勢について」

——全斗煥体制のゆくえ——

講演会の部

第三回講演会

日時 昭和五五年七月五日

講師及びテーマ

M・アビール教授（ヘブライ大学）

「石油と中東（及び世界経済）における安定性」

安全保障部会

第一回研究会

日時 昭和五五年九月二七日

講師及びテーマ

ベンジャミン・チュア氏（アメリカ大使館政治部勤務）

「日本に対するソ連の戦略と戦術」

第二回研究会

日時 十一月二二日

講師及びテーマ

岩島久夫氏（防衛研究所戦史部第一戦史研究室長）

「八〇年代の世界軍事情勢について」